

教職課程を履修する大学生の教職観の変容

—学生による教育課題のグループ研究を通して—

阿部 雅子

1 はじめに

中央教育審議会は令和4年12月19日、『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について～「新たな教師の学びの姿」の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成～（答申）¹（以下、「答申」という。）を示した。

そのⅠ部総論における子供たちの多様化と社会の変化における「Society5.0とポストコロナ時代の新たな学び」²の中で、様々な分野で予測困難な変化が非連続に発生する社会では、それに背を向けるのではなく、前向きに受け止める力が必要だと説く。

その様な能力を児童生徒から引き出すには、教職に就いてからでは遅く、教師の養成課程の段階から、意図的・計画的に進めていく必要がある。大学では、教師の免許、採用、研修に関する制度の見直しから、早期に教育実習が行われるなど、教職志望者の多様化や安定的な人材の確保に應える制度がすでに進められている。本研究の調査対象に該当する学生は、多様な学部から集まる教職課程の「教職論」を受講する2,3年生である。

キャリア形成の一環として資格を取得するいわゆる「選択肢を広げたい」学生群であり、取得の目的や教職観はそれぞれに違いがある。答申では、こうした多様な学生のニーズに現在の教職課程が対応していないことにも触れ、より柔軟な制度の見直しが図られるよう変更点が示された。授業の初め「受講生に民間企業等、教職以外の職業への志望を考えているか」という質問に半数以上の手が挙がった。その理由を問うと教師の労働環境の問題（長時間労働、給料に見合わない仕事量、残業代が出ないなど）が心配だという意見がほとんどであった。その一方で、自分が在学していた学校の担任や部活動顧問がロールモデルであり、自分もそのような教師を目指したいという者も少なからずいた。多くは、自分が教師に向いているかどうか不安であるといった適性の問題で迷っており、2年生時点では判別が難しいのであろう。

答申で示された「新たな教師の学びの姿」の実現では、「変化を前向きに受けとめ、探究心を持ちつつ自律的に学ぶという「主体的な姿勢」や、他者との対話や振り返りの機会を確保した「協働的な学び」がモデル像として示された。これらの学びは、養成課程で学ぶ大学生にも必要な資質・能力であり、授業で発揮させることには大きな意義を持つ。

そこで、教職論を履修する大学2,3年生に対して、前半の授業で学んだことから、学生自身が自ら問題だと感じる今日的な教育課題を選択させ、ICTを使った情報収集力及び、学生同士で発表し合うプレゼンテーション力において、主体的な探究心を発揮させること

とした。条件は次の2点である。第一に「批判的な視点を持ち考察すること」第二に「解決法に至っていない教育課題について自分なりの考えを盛り込むこと」である。考察に関しては、そこに至るエビデンスを示し、他の学生からの評価を共有することで各自省察を加え、新たな学びを創出し、思考力を深めることとした。

次に、協働的な学び合いを深める意図としては、類似するテーマを選択した学生同士のグループを編成し、テーマに関する現時点での対応策や、その是非について自分なりの考えを発表するように指示した。また、ICTや図書館を活用し、書籍・ジャーナル・論文等、様々な資料から調査した情報を班員で共有した後、プレゼンテーション資料を作成しグループ発表を行うこととした。普段の講義から、理論と演習を毎回組むことで継続的な力が蓄積されているため、発表の場はこれまでの学修の集大成の場であること、個人に閉じた学びから全体に開かれた学びにすることに意義があることを伝えた。

以上のようなグループ研究を授業に盛り込むことで、教職論を受講する学生の教職観³が受講前と受講後にどのように変容したのかを調査する。今回の調査の目的には、学生が教職に就く前に、予測困難な教職課題の実態や改善策を自ら調査することで、教職に対するレディネスを形成しうるのではないかという期待もあった。さらに、多様な学部より教職課程を履修している学生にとって、教員になるという選択が第一優先ではない状況の中で、自ら学び続ける意味と教職の良さを体験してほしいという願いもあった。教職課程を履修する学生のレジリエンス⁴を高めていくことは教職に就いた後にも必要な資質であり、「教育の基礎的理解に関する科目」においては、理論を学修すると共に実践的な視点で学校で起きていることを自分たちの眼で体得できるような仕組みが必要である。教育実習を行う前に、この様な教育課題のグループ研究を行うことは、学生の教職観の固定化を防ぐとともに、教職を志望する学生の新たな自信につながるものと思われる。

そこで、教職論を履修する学生の教職観について、授業前・授業後でどのような変容が生じたかを調査することとした。

2 問題の所在と先行研究

先に述べた答申のまとめでは、「新たな教師の学びの姿」のひとつに、変化を前向きに受けとめ、探究心を持ちつつ自律的に学ぶという「主体的な姿勢」が示されている。そこでは、教師の学びの内容の多様性に触れ、自らの日々の経験や他者から学ぶといった「現場の経験」も含む学びのスタイルの多様性を重視することが重要であると説く。それと同時に協働的な学びの実現が必要であることも示している。⁵

しかし、若手の教員離職者の増加、新卒者が着任後、自死に至る事例を扱う教材では、学生自身が経験し得ない複雑・多様な職務をこなしている教師の実態や、その過剰な職務をこなさきれず、誰にも相談できないまま孤立する教師の姿が描かれている。協働的な学びが必要であると理解しつつもなぜ実現できないのか、どうすればもっと改善できたのか、こうした議論の積み重ねが実際に教職に就いたときに多いに役立ち、自分の経験として蓄積されていくものと思われる。答申はさらに「理論と実践の往還」の手法による授業観・学習観の転換及び、教育委員会と大学との連携強化の促進に関して、養成段階における「新たな教師（教職志望者）の学びの姿」を実現する際の視点を次のように示している。

- ・「理論と実践の往還」は、教職大学院において同制度導入以来の中核的な理念であるが、学部段階での養成も含め、理論と実践を往還した省察力による学びを実現する必要がある。⁶
- ・養成段階においては、理論と実践を往還させた省察力による学びを実現し、学生の「授業観・学習観」の転換を図るため、大学と教育委員会が連携・協働し、教職志望の学生が、学習指導要領等としての活動のほか、総合的な学習（探究）の時間等における探究活動に学びの伴走者として参画すること等も含め、今日的な学校教育課題に対応した多様な現場体験・学習機会等の充実を図ることが重要である。⁷

以上のように、「令和の日本型学校教育」を現場で実現するには、学生が在学中に多様な実践体験ができる取組を展開していく必要がある。本論ではこの実践体験を実際に学校現場で体験することだけとせず、授業の中にケーススタディとして取り込む「演習」を多く盛り込み「実践教職論」⁸を学ぶ授業の学生を調査対象としている。

先行研究では、大学生の教育観・教職観の形成過程に関する追跡調査研究、前田他共同研究者5名（1995～2006）⁹で、10年間かけて4次に渡る追跡調査「大学に入学し教師をめざそうとする大学生は、どのような教育観・教職観、教職への意識、教職イメージをもっているのだろうか」というリサーチクエスションに対して次のような結論を導いている。

- ・学生たちの教育観・教師観は、観念的であるにせよ、入学時点で基本的な枠組みをもっており、それが補強され進化していくプロセスに養成教育がある。そのような教育観・教職観の基本的枠組ができていたからこそ、実践の場に出、新しく困難な状況に陥っても、自分なりに柔軟に対応することができたということである。

この調査から20年を経た現在、果たして同じような枠組みで教職観を継承していると言えるだろうか。興味深いのは、1995年調査と2006年調査の比較で「いじめや非行など現在の教育問題に関するもの」が44.7%から57.5%に増加している点である。「子ども・青年理解を深めるもの」に関しても44.7%から54.3%に増加している。その一方で「教師の役割や機能に関するもの」が34.1%から28.6%に、「教育とは何かという原理に関するもの」は30.5%から17.6%に減少していた。この調査後20年の間に浮上してきた地球規模の社会変動、児童生徒の貧困化の問題や教員不足の問題など、予測困難な教育課題の対処に翻弄される現代の教育に向き合う教師という職業に、「それでも教職を目指す」といったぶれない枠組みを学生が維持し続けているとは言い難いのではないかと予測できるのだが、果たしてどうだろうか。

比較的新しいデータでは、「教職に魅力を感じる大学生は何が不安なのか」を明らかにした園部（2022）の調査結果¹⁰が挙げられる。1年次必修「教職入門」受講者の自由記述分析より一番の不安カテゴリが「児童生徒対応」であることを明らかにした。これに関しては、前述した前田らの研究で示された「子どもとのかかわり」という点で一致する。しかし、「業務内容」「職業適性」に関しては、新たに浮上したカテゴリであり、園部によると調査対象が学修の経験が浅い大学1年生であることやコロナ禍の状況で学校現場に行くことが制限されてきた影響、またSNSによる労働時間、労働環境の問題を見聞きしてい

る影響も大きいのではないかと分析している。

これらの不安の軽減策としては、不安を受講者間で共有すること、実務家教員や現職教員である社会人学生などとの出会いを創出することの必要性を述べている。

このことは、本論で取り上げる中心課題でもあり、学生が見聞きしている射程範囲内の情報により形成される教職観が、現職教員による実践事例や先輩学生による教育ボランティアでの生の声を聴くこと、あるいは自分が疑問視した教育課題の実態を調査することで大きく変容するのではないかと、という仮説を立てた。

そこで、本研究では、先行研究の知見をもとに、教職課程を履修する大学生が行う教育課題に関するグループ研究を通して、教職観がどのように変容するかを検証する。

3 研究の目的と方法

3-1 研究の目的

本研究では、中学校、高等学校教諭を志望する大学2,3年に在籍する学生を対象に「教職論」の授業において取り組んだ教育課題のグループ研究に着目し、学生の教職観が授業前と授業後で、どのように変容するのかを明らかにすることを目的とする。

3-2 研究の方法

3-2-1 調査の対象

対象は、私立大学に在籍する中学校・高等学校教諭普通免許状（社会，数学，理科，保健体育）の取得を希望する大学生2,3年生80名である。

3-2-2 調査の方法と時期

調査① ＜第1回授業における教職観調査＞

2023年度前期（4月10日～7月14日）に実施された対面授業（教職論）の講義のうち、第1回の授業において教職に関する考えを記述する事前レポートを実施する。

設問1では「教職課程をとろうと思った理由」
設問2では「教師の仕事がブラック¹¹」
と思うか、思わないか」

設問3では「教師のやりがいとは何か」という設問である。

設問2,3に関しては、議論前、議論後に分けて自分の考えを記述させた。他者の考えに触れながら、多面的・多角的な視点を取り入れることで自分の考えに変化が起きたかどうかを図るためである。

第1回講義レポート		教職を志望する学び 教員とは何か 学校とは何か	
△所属	学部	学科	年
△学籍番号	氏名		
△提出日	2023年 月 日 ()		
1、あなたが教職課程をとろうと思ったのはなぜですか。			
2、教師の仕事はブラックだと思いますか、それともブラックではないと思いますか。			
議論前			
議論後			
3、教師のやりがいとは何か。			
議論前			
議論後			

図-1 第1回講義レポート

調査② ＜グループによる教育課題研究 評価シート調査＞

授業の構成は、前半をテキストにそって知識・理解を深める理論の時間、後半を学生同士のグループ討議から全体の共有を図る演習の時間とする。2023年度は、前期授業の後半部分（第12回～第14回のうち、7月3日、7月10日、7月14日に実施）に組まれたグループによる教育課題研究の発表（3限7班、4限9班の計16班のグループ研究）を行う。評価シートに示したように、発表班以外の学生による評価、発表グループの学生による自己評価、指導教員による評価を行う。その評価シートの自由記述欄より、学生の教職観の変容が見られる記述を抜き出すこととした。

調査③ ＜最終授業における教職観調査＞

設問4では「最終授業における自分の教職観が受講前と受講後に変ったか」という問いに関して、どのようなことが変わったのかを記述する。

設問5では「学生が教員を目指す上で不安だと感じることを」を記述し、その理由についても問うこととした。「不安はない」と回答した学生も、その理由を記述することとした。

設問6では、これからの自分のキャリア形成に関して、大学生活の中で自分に課題があるとしたらどのようなことを記述する。この設問は、本論の目的とは内容がそれるが、掲載の理由は受講生の特徴として多様な専門科目を専攻しながら教職課程を履修するため、影響因子を抽出させるために載せたものである。免許取得に関して学生のレジリエンスを安定的に維持することは、個人の状況によってかなり困難であることもうかがえ、その調査は別の機会に実施していくこととした。

教職論 グループ発表 【 】 班

【テーマ】

グループ発表の評価（自己評価）と感想（工夫点）

学部	コース
年 学籍番号	氏名
記入日 2023 年 月 日	

1、班の目標が達成でき、見応えや完成度がありましたか。班の目標達成度・完成度

該当する数字を○で囲んでください				
大変あった	まあまああった	普通である	ややなかった	全くなかった
5	4	3	2	1

2、テーマにそって、主張したいことが明確になっていましたか。テーマの適切性と主張の明確さ

大変明確になってきた	まあまあ明確になってきた	普通である	やや明確でなかった	全く明確でなかった
5	4	3	2	1

3、発表した内容は、班の工夫や特徴が見られたものでしたか。班の創意工夫

大変見られた	まあまあ見られた	普通である	やや見られない	全く見られない
5	4	3	2	1

4、プレゼンテーションの図や写真・動画等の選択の的確さや、問題を効果的に表す工夫が見られましたか。資料選択の適切性と工夫

大変見られた	まあまあ見られた	普通である	やや見られない	全く見られない
5	4	3	2	1

その他、発表を通して気づいたことを自由に記述してください。

○発表班は、準備で工夫したこと、苦労したこと、メンバーで確認したこと、成果や、課題などについて記述してください。

○発表班でない人は、興味を持った点や改善点などについて、建設的な意見をお願いします。

図-2 グループ研究 評価シート

＜最終授業 記述欄＞

○記述内容に関しては、成績に影響しません。また、個人情報が出ることはありませんので差し支えない範囲で記述してください。

4、教職論を終えて、最初の頃と教職に対する考えが変わりましたか。また、それはどのようなことから変わったのでしょうか。

5、あなたが教員を目指す上で不安だと感じることは何でしょうか。またその理由も書いてください。また、不安ではないという人は、なぜそう思うのかその理由を書いてください。

不安要素（不安はないという人はその状況を記入）

その理由

6、これからの自分のキャリア形成に関して、大学生活の中で自分に課題があるとしたらどのようなことですか。また、それは自分の大学生活の学びの中で解決していけると思っていますか。

図-3 最終授業 記述シート

1	生徒の問題行動 (いじめ, 暴力, 不登校, 引きこもり, ネット依存, 自傷行為等)
2	子どもの自尊感情の低下
3	子どもの貧困化
4	児童虐待
5	教員の労働環境問題 (働き方改革)
6	日本の教員の自己効力感
7	学級担任の専門性
8	学校の危機管理 (コンプライアンス)
9	教員の服務と懲戒 (不祥事と処分)
10	チームとしての学校 (成果と課題)
11	体罰
12	特別支援教育
13	学校教育と教育制度

表-1 講義「教職論」の演習で扱った内容

3限	4限
1班 いじめ問の変遷とその解決法について	1班 これっていいの? (いじめ)
2班 不登校	2班 自己肯定感の低さをどう改善するか
3班 教員の働き方改革	3班 あなたが先生になったとき, 自分のクラスに特別支援学級の生徒がいたらどう対応するべきか?
4班 教員のメンタルヘルス	4班 働き方改革について
5班 学級担任, 学級経営	5班 教員の不祥事
6班 学校の不祥事の現状と対策	6班 学校の不祥事の現状と対策
7班 チーム学校を中心にした危機管理の対応策	7班 体罰
	8班 ブラック校則
	9班 危機管理: 熱中症

表-2 学生が選んだ教育課題テーマ

4 結果

4-1 <第1回授業における教職観調査>から

【設問1】「あなたが教職課程をとろうと思ったのはなぜですか」

実際の意見交換場面では, 多様な学部から集まった学生のほとんどが始めて出会う初顔合わせであるため, 学部や名前といった自己紹介を交えながら, 発表が終わったら拍手を行うなど, 心理的安全性が確保できる工夫を行うよう指示した。他のグループから拍手が起ると「自分たちの班も」といった相乗効果が生まれ, 自然に談笑できる雰囲気形成されていた。

以下, 数名の事例を紹介する。

○人間科学部の学生の記述より

- ・現在の競技生活が終わり第二の人生を歩むとき少しでも多くの選択肢を残すため。
- ・中学校1年の担任が授業だけでなく, 困っている生徒に対しての接し方などを見て,

その姿に憧れたから。選択肢の幅を広げたいと思ったから。

- ・ 子どもの教育にかかわりたいという考えを持っており、まずは資格をとろうと思ったから。

○経済学部の学生の記述より

- ・ 大学1年生のときにアルバイトで学習塾の先生をしていて、勉強を教えるということががすごく楽しかったので、将来就く仕事のひとつとして、学校の先生を考えてみようと思ったから。
- ・ 将来何をしたいのか決まっていなくて、教師に興味があったから。
- ・ 将来の選択肢を広げるため。

○理学部の学生の記述より

- ・ 自分が知った理科の面白さを伝えていきたいと思ったから。精神的にも子どもの成長に関わってみたいと思ったから。

○工学部の学生の記述より

- ・ より良い教育システムをつくるための教育について学びたいと考えたから。
- 学生の記述からは、概ね以下のような内容に分類されることが分かった。

- ①選択肢を広げるため
- ②子どもの教育や成長に関わりたい
- ③自分の所属する学部の専門性を活かしたり、その良さを伝えたり、学びの継承を図りたい
- ④自分の経験からロールモデルとなる教師がいた
- ⑤自分の経験から楽しさを感じた

全体を通してこれらの理由にほぼ当てはまる結果となった。

選択肢を広げたいとする考えは、学部の専門教育を受けている学生が対象であるため、教職課程を履修しようと思った理由に挙げる割合が多かったが、この傾向は中学校、高等学校の教員採用試験の受験者数が、新卒・既卒ともに5年間で2割以上低下したことを考えると、ペーパーティーチャーの増加は増えることが予想され、免許制度の改革や更新制のメリットを再構築する必要性が早急に求められている実態が見えてくる。

【設問2】「教師の仕事はブラックだと思いますか。それともブラックではないと思いますか。」

SNSによる労働環境実態の拡散や超過勤務に関する裁判の事例も公開されており、教師の労働環境に対する学生の捉え方は敏感になっている。以下は、抽出した班の一例である。

【議論前】

ブラックだと思う	ブラックだとは思わない
<ul style="list-style-type: none"> ・ 仕事量と給料が見合っていない。 ・ モンスターペアレンツの扱いが大変でメンタル的にきつい。 ・ 制度的に休みが多くても、現実的に休みがとれない。 ・ 役割を持つと定時に帰ることができないから。人によるのではないかとも思う。 ・ 朝練や授業準備のために定時で働くことができない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 子育てをしながら働いていた教師がいたが、子どもが熱を出して休んだときに代わってくれる先生がいた。学校ではそれが通用するが民間では通用しない。

【議論後】

ブラックだと思う	ブラックだとは思わない
<ul style="list-style-type: none">・残業手当がつかないから。・労働時間が長いから。・ニュースで見えていたらそうだったから。・中学校の先生を見ていていつも大変そうだったから。	<ul style="list-style-type: none">・やりがいという点ではブラックではないが給料や労働時間という点からはブラックである。・残業の問題等、まだ改善されるべきことはあるものの、それ以上にやりがいの方が大きく残業の分担、アウトソーシング等の活用でうまく働くことは可能だと考えるから。

結果は、議論前にブラックだと思うと答えた学生数が全体の93%(80人中74人)であった。議論後は、どちらでもない。人によるという回答に動いた学生が若干名おり、ブラックだと思う学生が89%(80人中71人)となった。興味深いのは、ブラックであろうがなかろうが議論前には個人の見聞きした意見が中心であり、「自分はそう聞いた、そう見た」「ニュースでそうだった」という個人の見解の範囲を出ない意見が主であり受動的であるのに対し、議論後はより具体的にその根拠にまで及んで詳細な意見が出ている点を指摘したい。これは他者の多様な見方に触れることで、より思考の射程が広がり、自分たちの意見として学生が主体的に思考できている結果であると言えるのではないだろうか。三人寄れば文殊の知恵と言うが、グループで意見を出し合うことで協働的な学びが深まった証拠であるともいえる。

【設問3】「教師のやりがいは何だと思いますか。」

【議論前】

<生徒の成長>	<ul style="list-style-type: none">・ <u>子どもの成長</u>を直に感じられること。・ 卒業式などで生徒の心身の成長を見届けられること。・ 人が成長する場面に立ち会えること。・ <u>生徒の成長</u>を近くで感じることができること。・ <u>生徒の学力</u>が上がったとき。(学力も成長と捉えた場合)
<教師の使命感>	<ul style="list-style-type: none">・ 家以外の場所(学校)を<u>安心できる場所</u>にすること。・ 相談にのり自分の経験から的確なアドバイスができること。
<生徒からの力>	<ul style="list-style-type: none">・ エネルギーをもらえること。・ 生徒がなついてくれたとき、<u>信頼</u>、<u>感謝</u>、<u>成長</u>、<u>笑顔</u>

記載されたものは一部の記述であるが、やりがいが一番回答数が多かったのは「生徒の成長」であった。次に挙げられたのは「教師の使命感」である。

生徒の存在そのものからもらうエネルギーや生徒からもらう感謝などにやりがいを感じるということが多く記載されていた。次にグループ討議後に話し合った意見を示す。

【議論後】

<子どもの成長>	<ul style="list-style-type: none">・ <u>社会を担う子どもの成長</u>。・ 生徒が<u>できなかったことができるようになる</u>。・ <u>志望校に合格した</u>、<u>卒業できた</u>、<u>テストの点が上がった</u>。
<教師の使命感>	<ul style="list-style-type: none">・ <u>教育に携われること</u>。・ 企業で働くよりも<u>やりがい</u>がある。<u>感謝</u>されると思うから。
<双方の相互作用>	<ul style="list-style-type: none">・ <u>信頼関係</u>が築ける。・ <u>共に成長</u>できること。・ 子どもと接して教師が<u>前向き</u>になれる。
<生徒からの力>	<ul style="list-style-type: none">・ 生徒が<u>会いに来てくれること</u>。・ <u>元気な姿に出会えること</u>。・ <u>先生のおかげ</u>でできるようになったという<u>感謝</u>。

議論後は上記のように、より具体的な場面や状況が付加されている。また新たに「教師と生徒が共に影響し合い、関係づくりを行いながら成長する」という相互作用の仕組みを見事に述べている。教師という職業は、目の前の子どもから受ける力をたよりに教師も向上するという職性を持ち、「人格と人格が相互に関わることで成長できるという視点」が付け加えられたことは、議論による大きな収穫であるといえる。

4-2 <グループによる教育課題研究 評価シート調査>から

次の記述は、表-2に示されたグループ研究の発表後、全受講生による評価の記述の中に、学生同士が教育課題を共有することで、新たな学びが生じたことに言及している箇所を抜き出したものである。学生の評価からは、これまで自分のイメージだけで捉えていた教育課題が、グループ研究の結果から協働的な学びに転換し明らかな見解に結びついたとする記述をできるだけ抜き出した。以下にその一部を示す。

<3限>

○2班〔不登校〕の発表に対して

- ・生徒一人一人が安心して登校したいと思うような環境づくりを行うのは、教師の役割だと思うので、いじめの早期発見、適切な対応をする必要があると思った。

○3班〔教員の働き方改革〕

- ・部活動中に発生した問題の責任は顧問にあるので、ただ単純にアウトソーシングを実施するのではなく、議論の必要があると思った。

○4班〔教員のメンタルヘルス〕

- ・生徒が良好なメンタルをもつには、学校現場で一番近い存在である教員のメンタルヘルスも良好である必要があると思う。教育現場全体としてメンタルヘルスについて考えていかなければならない(a)と思った。

○4班〔教員のメンタルヘルス〕

- ・教員の精神疾患が問題になっている中で、教員を目指す学生にとっても重要な事であり、自分たちが仕事をしやすい環境を作っていくべきだと思った。(b)

○5班〔学級経営、学級担任〕

- ・教員は生徒の鏡となるような態度、行動を示す必要があると思った。いじめを目撃した場合は、柔軟に対応し適切な対応を継続的に実施していきたいと思った。

○6班〔学校の不祥事の現状と対策〕

- ・職業に対して誇りと自覚を持つことが不祥事をなくすというのは、とても核心を突いていると思った。教員の不祥事は（暴力やセクハラ）は、児童生徒の安全や心理的な健康に大きな悪影響を及ぼす。仕事に対する誇りもち、適切な言動を心掛けて職務を全うしたい。

○7班〔チーム学校を中心にした危機管理の対応策〕

- ・対応する手順が決まっていたり、マニュアルがあったりすることは、教職をとる学生にとって知っておかなければならないこと(c)だと思う。災害時の対応や、避難訓練でより学校の整備状態や配置などの細かい所を確認した方がよいということを伝えており、とても勉強になった。

<4限>

○1班〔これっていいの？ (いじめ)〕

- ・いじめを解決するには加害者、被害者の両方にケアを行っていくことが必要であるということがよく分かる。被害者をケアしないと自死してしまうし、加害者もケアしないといじめの行為を繰り返してしまうので、どちらの心理も知っておくことが教師を含め学校に関わる人間には必要だと思う。(d)

○2班〔自己肯定感の低さをどう改善するか〕

- ・ボランティアで自己肯定感の低い子どもと関わっていて、一番大きな原因は家庭にあるのではないかと思った。しかし、教育現場だけでその子たちを救うのは理想でしかないのではと思う。受け入れる心と信頼も大切だと思った。自己肯定感の低い子どもはとても優しく自己を犠牲にしてしまう子が多いので少しでも助けたい。

○3班〔あなたが先生になったとき、自分のクラスに特別支援級の生徒がいたらどう対応すべきか？〕

- ・もし自分のクラスにいたらということを考えながら聞いたら、もっと詳しく知りたいと思った。
- ・教師になってからも、学び続ける姿勢の重要性を改めて感じた。特別支援級の生徒がいる時、そうでない生徒に対する指導やコミュニケーションの取り方など、学級経営の方向性について考えるきっかけとなった。

○9班〔危機管理：熱中症〕

- ・体育の教員を目指す立場にあるので、学校保健的な視点からの発表はとても興味を持ち役立つものであった。生徒たちは、自身の体調管理が完全にできないわけではないため、教師としてのサポートや指導する上での注意点等、知識をつけておく必要性が伝わってきて良かった。
- ・学習指導要領やマニュアル通りにはいかない、教師が柔軟に対応する必要があるという主張は、子どもや社会が変化している環境下でとても良い意見だと感じた。(e)

下線部は、学生がグループ発表を通して記載された学生の意見から、自分が教師となったときの目線で回答している箇所を抜き出したものである。多岐に渡るテーマの中から、教師としての自分を想定し、あたかも現場にいるような感覚で述べている回答も散見されるが、それ以上に興味深いのは、社会の目線で回答している意見が述べられている点である。特に下線(a)～(e)で示した記述である。

グループ発表を聴いて、個人(学生)としての意見→教師としての自分→教師としての自分がやるべき使命にまで広げて言及している点では、単に「教職を知る」という知識習得型の一斉授業では得られない深い学びが学生の意識を変え、学生自身の教職観に大きな影響を与えたものといえる。

4-3 <最終授業における教職観調査>から

最終授業では、教職論の授業を受ける前の「教職観」について聞いた第1回授業レポート用紙の裏面に【設問4】～【設問6】を設け、グループ発表を終えた段階における学生の意見を集めた。受講当初はほとんどが知らない者同士のスタートであったが、グループの役割分担を決め、教育課題の発表の準備を進める上で協働的なチームワークを発揮し、

個人の学びにもその影響が表れていることが分かった。以下、学生の意見を一部紹介する。

【設問4】「教職論を終えて、最初の授業の頃と教職に関する考えが変わりましたか、それはどのようなことから変わったのでしょうか。」

- ・考えは変わった。最初の頃、教職はブラックであるという考えだった。しかし、教職論を終えて、まだ完全に改善されたわけではないが、改善に向けた動きが為されているということを知ったため、ブラックではなくなってきたという考えに変わった。
- ・全く逆の考えになることはなく、むしろ詳しく業務の実態を知ることができ、決して「ブラック」という面だけではないことを再確認できた。(a)
- ・教師の仕事は、やはりブラックであるということは分かった。ただ、これまで「教師」という仕事がどれだけブラックであるのかは分からなかったため、講義を終えて具体的に理解することができたと思う。(b)
- ・より一層教育のデジタル化を進めたいと思った。具体的な効果やちょっとしか負担を軽減できないかもしれないが多くの人のためになる教育システムをつくりたい。(c)

上記の記述からは、学生の素直な学びの声がうかがわれる。実態を正しく知ることが、いかに学生の学びを深め、次の学びへと継承できるのか、その示唆を得ることができた。特に、(a)は正しく知ることにより、「教職のプラス面を理解した」と解釈できるが、(b)は正しく知ることにより「教職のマイナス面をより詳しく理解した」と述べており、対立する二項の正負両面を持ち合わせる教職の実像を新たに体得できたことが明らかとなった。

また、(c)はシステム情報工学を専攻する学生であるが、教職を知ることで、自分の専門知識を生かすルートを発見したことを記述している。

このように、学生は個々の専門性を生かして自分の強みを社会に役立てたいと考えており、教師を目指さないまでも教職課程を履修することで、教育への視点をもつ社会人の育成につながる可能性は十分にある。教育課題を何とか改善したいと思っている学生は多く、こうした若手の人材が教育環境を変えていく次世代の担い手となっていくことは間違いない。

【設問5】「あなたが教員を目指すと仮定して、不安だと思うことは何ですか。また、その理由も書いてください。また、不安ではないという人は、なぜそう思うのか、理由を書いてください。」

1 [不安要素] 理由	他の教員や地域の方たちと上手く連携できるか 連携し合えないとトラブルにつながるということを学び、上手くできるか心配になったため
2 [不安要素] 理由	危機管理 教員の大前提として「子どもを預かっている」ことから、命に係わる問題が発生した時の対応が、自分にもできるのかどうかという不安がある。
3 [不安要素] 理由	ブラックであるという点 働きすぎてしまう点から過労死してしまうのではないかと不安から
4 [不安要素] 理由	メンタルヘルスによる不調 教員の超過勤務に対して、それに見合わない給料、制度として進んでいる様子が感じられない。環境改善が進まない中、教員を続けられるかどうか不安。

この設問では、多くの学生が教員の労働環境改善が進まない実態を捉え、給与、制度改革、休職者の増加を挙げて“不安要素”としている。授業を終えて、国の動向にも関心が高まり、実効的な改革を養成段階の学生も望んでいることが分かった。

【設問6】「これからの自分のキャリア形成に関して、大学生活の中で自分に課題があるとしたらどのようなことですか。またそれは自分の大学生生活の学びの中で解決していけるとおもいますか。」

この設問は、直接本研究とは関連がないため回答の掲載は行わないが、学生は教職課程の履修に関して、自分の弱み（学業・アルバイト・サークル活動等の両立やコミュニケーションが苦手といった学生自身の属性に関する悩み、教師の資質・能力が自分にあるかどうかという悩み）をしっかりと自己分析していることが分かった。また、そうした自己の課題の解決策として、80%くらいの出力で無理しない、友だちと支え合う、グループワークで対話の力をつけていく、といった具体策を生み出していたことも新たな発見である。教職課程の履修を負担と捉えるのではなく、自分の自己実現というポジティブな捉え方に変換させることで乗り切ろうとしている記述も見られ、その様な意思をもつ学生が子どもたちのロールモデルとなり、共に教育の現場で教師と生徒の好循環が創出されていく環境こそが、これからの日本型学校教育の一端を担うことになるのではないかと考える。

5 まとめと今後の課題

本研究では、中学校、高等学校教諭を志望する大学2、3年に在籍する学生を対象に「教職論」の授業において取り組んだ教育課題のグループ研究に着目し、学生の教職観が授業前と授業後では、どのように変容するのかを明らかにすることを目的とした。

実際、学生は「教職論」の授業で一番苦労したのは自分たちが主導的な授業者の立場でプレゼンテーションを行い、他の学生を受講者として迎えることの難しさであったと言っている。調べたことをいかに正確に伝え、興味を持たせ「それはなぜなのか」「どうしたらもっとより良くなるのか」といった疑問に答えるには、ただ調べただけで終わりという受け身の姿勢では成り立たない。発表するメンバー一人一人が探究心をもって思考しなければならず、その探究心から、さらに次の新たな問いが生まれ、悩み、また調べることで思考が広がっていく。教職の本来の姿は、この指導者と生徒が共に創り出す授業を経て、人格と人格の相互作用により知の創生や人間の喜びを享受するものであるということを、学生はすでに講義では分かっていた。分かっているながら実際にそれを実践する機会はないかった、ということになる。グループ研究ではそれを体験し、教職に対する捉え方は各々違っていても明らかに授業前、授業後では教職に対する考えに変化が生じていた。

目的に示した「どのように変容するのか」に関しては調査①②③を通して考察したが、調査①（授業前）③（授業後）と、②（グループ研究）との関連性が弱かったため、グループ研究で柱としたメンバーの主体的な姿勢「探究的な学び」と、役割を全うしながら協力して発表しようとする「協働的な学び」から得た教職観の変容因子が今一つ明確にならなかった点が反省点である。

授業を通して、さらに発展的に知りたい、調べてみたいという教育課題に取り組んだこ

とは、学生のモチベーションを上げる結果につながり、ブラックという炎上した言葉だけに翻弄されるのではなく「教職の本質が見えた点」さらに「学修したことと社会で起きていることが接続できた点」また「自分のキャリア形成上の手ごたえが得られた点」など、教育を通した視点が形成されたことが、新たな自分の「教職観」を創出していた。今後の課題は、以下の2点である。

第一に、今回の調査は、量的調査ではない為、調査対象の母数が少なく妥当性に限界があった。調査対象者が多様な学部に属していることもあり、逆にそれを強みとして多様な意見が抽出できることを期待したが、グループを混合することでメンバー同士の力量が平均化されてしまうこともあったのではないかと懸念する。グループ編成過程での変容は、調査対象にはなっていなかった為、どのように変化したのかが曖昧であった。経過観察を入れるなど、今後はそのあたりの思考の変化を見ていきたいと考える。

次に、対象学生は教育実習前であり、多少就職活動に向けての期間があるため、教職に対する必要感が高まらない学生も一部見られた。そうした心理的な面も勘案しながら調査を組んでいくことが大切だということが分かった。

令和の日本型学校教育を担う教師の養成・採用の問題は今後も継続して取り組んでいかなければならない問題である。日本の教育課題が改善に向かうよう、学生の学びがさらに発展的に社会に役立っていくことを期待しながら次の研究に生かしていきたい。

【注・引用文献】

- 1 『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について～「新たな教師の学びの姿」の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成～(答申) 令和4年12月19日 中央教育審議会
https://www.mext.go.jp/content/20221219-mxt_kyoikujinzai01-1412985_00004-1.pdf
- 2 前掲注1) p.7 (accessed 2024.1.9)
- 3 本論では、教職論を受講する学生が調査対象であるため、授業で扱う学修内容にそって「教職」の定義を「社会の要請に応え、子どもの人間形成に深くかかわり教え導く職務」と定めた。そのため、レポート等の回答に個人の解釈の違いが多少反映されることも予想されるが、概ね授業の学修内容にそって解釈しているものと判断している。
- 4 ここでは「学生の精神的な回復力」といった一般解釈として捉えている。教職課程を履修する学生の中には学費負担を軽減するためにアルバイトと学業を両立させている者、奨学金を受けている者、コロナ禍においては大学から配給される生活必需品を利用している者も見られ、かなりの精神的負担を抱えている実情がうかがわれた。レポートからは「心が折れそうになる」という記述も見られ、学生側の立場から何とか乗り切りたいという思いの「レジリエンス」の状況という解釈も含まれている。
- 5 前掲注1) p.22 (accessed 2024.1.9)
- 6 前掲注1) p.23 (accessed 2024.1.9)
- 7 前掲注1) p.46 (accessed 2024.1.9)
- 8 教職論の使用テキスト『実践教職論』近藤昭一 著 ナカニシヤ出版 2021年
- 9 前田 一男・宮下 佳子・佐藤 良・油井原 均・長谷川 慶子・大島宏 (2010)「大学生の教育観・教職観の形成過程に関する追跡調査研究 1995年調査と2006年調査の比較から」立教大学教育学科研究年報 53 93-134,2010-03-20 pp.118-120
- 10 園部 友里恵 (2022)「教職に魅力を感じる大学生は何が不安なのか ―1年次必修「教職入門」受講者の自由記述分析から―」三重大学教育学部研究紀要 第73巻 教育実践 467－475頁 p.471-474
- 11 ここでは、ブラック企業(公務)の略としての一般解釈である。超過勤務を強いる教職員の労働環境問題を持つ学校の体質を指す言葉として使用している。